

岩瀬瑞穂さんのお話

朝鮮半島、夜の逃避行

東和泉に昭和37年から住んでいる岩瀬瑞穂と申します。

きょうは皆様に私の少ない戦争の記憶を、父母から聞いたことも混えてお話させていただきます。

父は熊本県出身で、母より何年か先に弟や妹と共に北朝鮮に渡り、興南にある日本窒素で働いていました。昭和14年に同じ町内の母とお見合いし、結婚式当日に面会して、直ぐに興南へ向かい新生活をスタートしました。

私は第二次世界大戦が始まった年に生まれ、終戦の時は4歳で、引揚げの途中で5歳になりました。

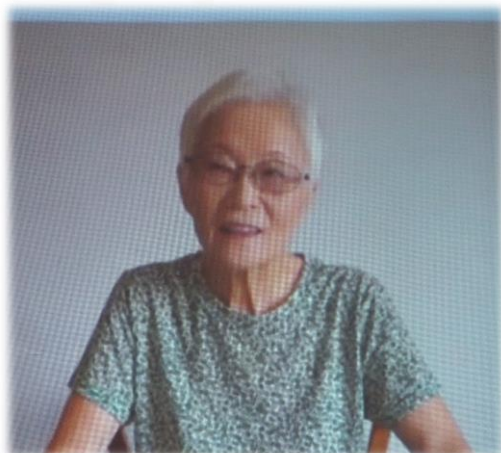
戦前は日本が支配していた町ですので、ひとつの町ができていて、住居はレンガ造りの二階建てアパートでオンドル付き。他に平屋の社宅も沢山あり、幼稚園から女学校までありました。病院も食品販売所もありました。古い写真のコピーを数年前、知人が分けて下さり、町の立派さにびっくりもしました。皆、平和に暮らせていました。

終戦の前日に父は招集され、捕虜になり、シベリアへ連行されました。

逃避行が始まったのは昭和21年春。3月でまだひな祭り、ひな人形が飾ってあり、私が人形を持って行くと泣いて、なだめるのに母は苦勞したらしい。社宅明け渡しは突然だったそうで、妊娠10カ月の母は私5歳、弟3歳を着の身着のまま、家を後にしたのです。社宅には2度と戻れませんでした。

記憶は恐怖のみのいくつかですが、忘れたくても忘れられずに、時折、よみがえってきます。

一番はっきり覚えているのは、避難先の倉庫のような建物の中にロシア兵が入ってきて、若い女性は悲鳴を上げ乍ら連れ去られた時、私はロシア兵に「高い！高い！」をされて大泣きしました。いま思えば、兵隊さんにも同年齢のお子さんが居たのかもしれないと思います。



この高い！高い！の記憶がよみがえったのは、私が小学校4年の時、宮崎市にエレベーターができたらしいから見学に行こうと言って、父が私と弟を連れて、電車に一時間半乗って行った、エレベーター初体験の時でした。上に登るときと、スーッと下りる落ちた感じが全く同じでした。今でも忘れられません。

もう一つ。むごい記憶です。

それは暗い山道におばあさんと小児マヒの男の子が捨てられていたことです。

歩けなくなったから捨てられたのです。

ハエがブンブン飛んでいました。

思い出すたび、むごい！と胸が痛くなります。

母が、戦争の時は人間が人間でなかった、死体の山も沢山みだし、捨てられた人を見ても誰も助けなかった、と言っていました。

飢えに耐え切れず、お米と子供を交換した人もいたそうです。私にはお世辞だったと思いますが、可愛いから米2升でどうですか、と言われたらしい。米2升と幼子の命を秤にかけたとすると、あまりにも差があり過ぎて、そこには人間の心は見えません。

釜山から博多への船の中で、バケツに入ったグチャグチャのご飯をみて、私は「食べない」と言い張り、母に「食べないと死ぬよ」と言われても死の意味が分かりませんでした。今の給食のようにきれいなバケツではありませんでした。

話は戻り、夜の逃避行が始まりました。

母は全員殺されると聞いて、夜中に30人づつ程に分かれて、山道のみを伝い歩いて、飢えと恐怖の繰り返しで、二カ月くらいかけて200～250km位は歩いたと言っていました。

クツの底が抜けて足が痛い泣く私に、母は「泣くとロシア兵に殺されるから泣かないで」と何回も諭し、「崖にも突き落とされる」が口癖でした。

38度線までの間、食べ物は現地の人で優しい人にも何人も会い、残ったご飯をもらったそうですが、乞食同然だったらしい。母は引揚げの途中で三人目を出産し、へその緒も自分で切って、その後よくも歩いて、妹の生命があったものだと、母の子どもへの愛の強さに感謝しています。

やっと38度線のあるイムジン河へ到着しましたが、渡し船のお金を母は持ってなくて途方に暮れたこと、このことは何回も話していました。でも、どこにでも助けて下さる心優しい人はいるのですね。船頭さんが、夜に暗くなったら、この木の下に待っていて、と言って下さり、夜に迎えに来て船で南鮮（韓国）へ渡して下さったのです。母は死ぬまで、船頭さんに会ってお礼が言いたいと言っていました。

船頭さんのご厚意で、私たち母子4人は命が途切れませんでした。

15, 6年位前、イムジン河を旅で尋ねましたが、



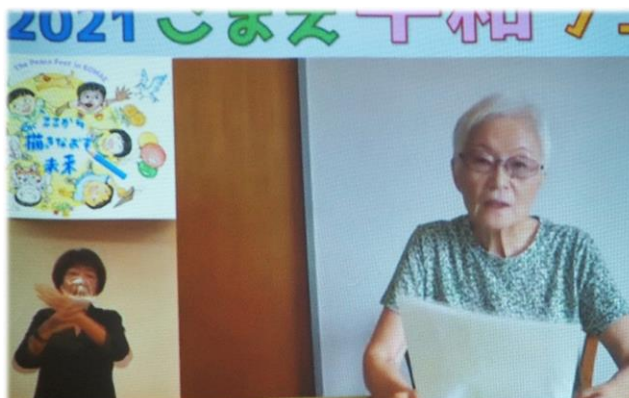
終着駅のトラサンには機関銃を持った兵隊さんが何人もいて、パスポートは預けるように言われ…、知らずに景色を撮った人には大きな笛の音が遠い方から聞こえ、フィルムは抜かれました。鉄条がグルグルとそこいら辺中、巻かれていて、戦争がまだ残っていると感じました。

父は私が小学校1年の6月、三年ぶりにシベリアから帰国し、同系列の会社、宮崎県延岡市旭化成支社に戻ることができ、44年間一筋に働いて私たちを育ててくれました。

父が帰国したとき、弟と妹は薄汚れた軍服の父を見て「コワイ」と言って大泣きをしていました。「父ちゃん」と呼んだのは私だけでした。

小さな体の母が大きな声で、毎回、「戦争だけは絶対してはいけません。何一ついい事がないのです。」と、語る会の最後に言っていました。もっと両親に話を聞いておけば良かったと、今更に思います。

今年、私は80歳、弟78歳、妹が75歳になり、健在です。



最後に、約30年前に、父方の祖父がニューカレドニアに移民で渡った過去があり、在日の方々のご協力で移民百年祭に父の代わりに招待され、10日間ニューカレドニアの日本人墓地を何カ所も墓参しました。墓地はきれいに保たれていましたが、亡くなられた人の多さに胸が痛くなりました。父の従弟の墓標もあり、血のつながっている現地の人、5人の家族には「自分たちのルーツが分かって嬉しい」と感動してもらえました。戦争に負けた後、日本に泳いで帰ると言って海に飛び込んで亡くなった人もいたそうです。

ニューカレドニアの一族はすぐに日本にも来て、3週間、我が家に滞在して日本を楽しみ、喜んでくれました。

ニューカレドニアはフランス語です。身内の奥さんは少々英語ができましたので、私は辞書を片手に意思表示。何とか通じ、宮崎と熊本を案内し、熊本出身であることも実感してもらい、小さな国際交流ができました。

ご清聴をありがとうございました。

以上